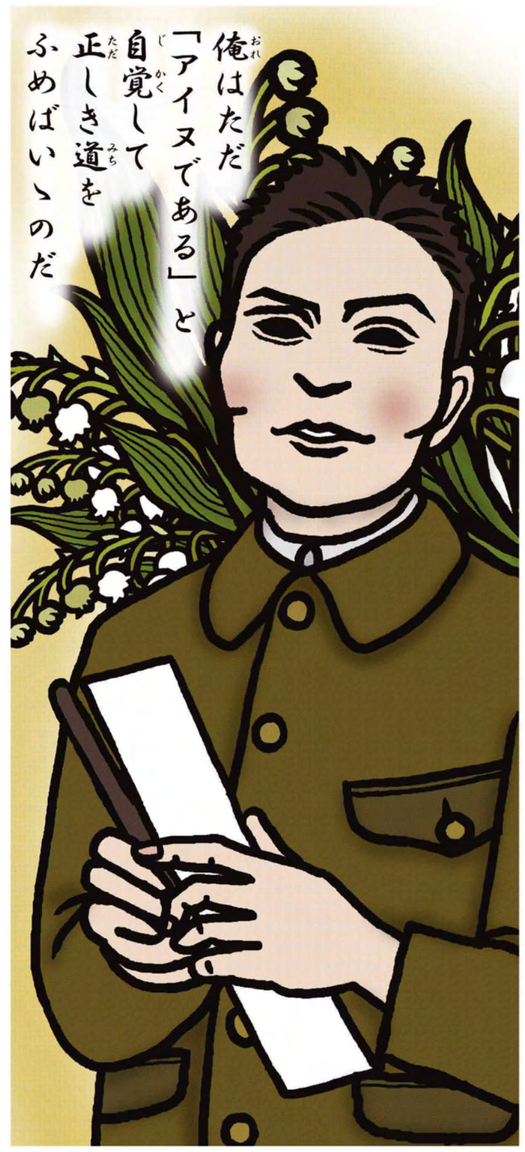
先人たちの物語 シンリッオルシペ

監修　佐々木 利和



違星 北斗（1901～29年）

勇気あたえる歌残す

後志管内余市町に生まれた違星北斗（本名・滝次郎、普段は竹次郎と名乗る）は、短歌や文章によって世の中を変えようとした男性です。

北斗は、余市のアイヌ民族の指導的な立場にあった家に生まれました。北斗が生まれたころ、家族は漁業をして暮らしていました。お母さんはとても教育熱心な人で、北斗を和人の子供が行く学校に入学させました。すると、アイヌであることを理由につらいいじめや差別にあいました。

学校を卒業してからも差別はなくならず、やがて北斗の心は「死んでしまいたい」と思うほど、深く傷ついてしまいました。和人はだれもかれも敵だと思うようになりました。

ところが、地域の学校で校長をしていた1人の和人男性に会い、和人の中にも優しい心をもった人がいることを知りました。そして、もう一度勉強を始め、アイヌ民族を低く見る世の中を変えようと決心します。

1925年（大正14年）に北斗は上京し、仕事をしながらいろいろな講座や勉強の会に参加して、思想（ものの考え方）や日本社会の仕組みをもうれつに学びます。北斗にとって一番幸せな時期でした。

東京で1年半暮らした後、北海道へもどります。東京で感じた幸せを、アイヌ民族全体が感じられるようにすることを目指したのでした。

そのために多くの仲間をつくり、アイヌの文化や言葉を正しく知らせようと考えました。アイヌとしてのほこりを持ちながら和人とかたをならべ、どちらが上ももない世の中を作る。北斗はそれを「同化」と表現しました。

北斗は行商をしながら多くのアイヌ民族をたずねましたが、やがて結核という病気になり、1929年（昭和4年）1月に亡くなりました。

北斗の生涯は27年という短いものでしたが、その中でたくさんの歌を残しました。北斗の悲しみをうつしたはげしい歌、強い決意と覚悟を表した歌は、その後も多くのアイヌ民族の胸を打ち、勇気をあたえています。

（敬称略）

書くアイヌ文学の登場

北斗が生まれた後志管内余市町は、アイヌ語ではイヨチといいます。渡島地方や檜山地方、日高地方、樺太のアイヌ民族と交流が盛んで、それらの文化が混ざり合い、北海道の中でも特色ある文化が生まれた地域です。

江戸時代には、和人の支配に対抗する行動をたびたび起こすなど、気骨ある人々がくらしてきた場所として知られています。ユカラやサコロペなどの文学にもイヨチコタンの名前はよく登場し、イヨチのリーダーは理想的な人物としてえがかれます。

アイヌ民族の文学といえばこうした口伝えのものを思いうかべますが、明治や大正時代になると、新聞などに文章を発表したり、本を書いて自分の意見を伝えたりする人も増えました。

アイヌ民族にも和人の庶民にも文字がふきゅうし、いろいろな立場の人が文章を書くようになったためです。

北斗は東京にいた時代に、登別のアイヌの少女、知里幸恵のことを知りました。幸恵は19歳で亡くなっていましたが、彼女が書いた本「アイヌ神謡集」と、そこに書かれているアイヌ語・アイヌ文化への強い思いを知り、しょうげきを受けました。

有珠（伊達市）でキリスト教を教えながら、付近のアイヌ民族の暮らしを良くする活動をしていたアイヌ歌人、バチェラー八重子も、北斗にえいきょうをあたえています。

ミンタラ

アイヌ語で「広場」の意味

文　北原 次郎太　　絵　小笠原 小夜

ヘカチ マッネカチ

川上　菜柚希さん（11歳、小5）

―札幌市

―すごく一生懸命ですね。学校ではどんなことをしてますか。

友だちとペン立てをして遊んだり、ドッジボールをしたり。授業では社会が好きです。

―6年生になったらやりたいことは何ですか。

なわとびで二重とびができるようになりたいです。中学はお母さんが通っていた同じ学校に行くので、お母さんが入っていたバレーボール部に入りたいです。

―将来の夢は。

おばあちゃんと同じ仕事。小学校に行って子供たちにアイヌ文化を伝える仕事をしているので、私もそういうことをしたいです。

―すてきな夢ですね。ありがとうございました。イヤイライケレ。

◇

「ヘカチ マッネカチ」は「男の子 女の子」という意味です。若いアイヌの人にインタビューするコーナーです。

―イランカラプテ、こんにちは。菜柚希ちゃんは札幌生まれなんですね。

はい。札幌は都会だけど、アイヌの人はみんな優しくていいところです。夏はよく平取（日高管内）に行きます。おばあちゃんと山菜とりをするときも、平取に行きます。

―最近好きなことは？

ユーチューブで音楽をきくこと。お母さんが好きな「オメでたい頭でなにより」というグループの曲をよくききます。

―気になる名前ですね。

あとはアイヌ語をおぼえたりとか。おばに電話で聞きます。

―今年は初めて「イタカンロー」（アイヌ語弁論大会）に出るそうですね。

はい。お母さんが出るので自分もやりたくなって。おばにお話を教えてもらいました。ホタテ貝が空を飛ぶ話です。後半の方をおぼえるのが大変です。

ホタテが空飛ぶ お話教わる

読んでみよう

アイヌ語には日本語にない音があります。これをカタカナで書くときには字を小さくして表します。このページのタイトル「ミンタㇻ」の「ㇻ」もそうですね。小文字は全部で14種あります。毎回、そのいくつかの読み方をしょうかいします。

今回は「ㇺ」です。例えば「スサㇺ」（ししゃも）、「カㇺ」（肉）、「リㇺセ」（おどり）という単語などに使われます。日本語の「ム」は発音した後にくちびるが開きますが、「ㇺ」は閉じたまま終わります。

くちびるのとじ方が弱いと「ン」になってしまうので気を付けましょう。

「ㇺ」の発音を動画でも学べます。出演は関根摩耶さん。指導は千葉大学の中川裕先生です。スマートフォンを持っている人は、ＱＲコードから読みこんでください。